

平成29年度第2回（通算第88回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

教員世話人 川口喜治

院生世話人 荒木麻耶 ビジネス・ILU・I7511

十亀陽太 中村光里

- 日時 平成29年5月24日（水曜日）16時25分より
- 場所 B202（北キャンパス）
- 主催 大学院国際文化学研究科
- 発表者 国際文化学研究科 教授 西田光一

題目 付加価値を担うことばの研究の新構想

要旨

冒頭から一方的な質問で失礼します。言語学は法律、文学、歴史、哲学といった分野とは何が違いますか。少なくとも表面的には法律や歴史などの分野も本を読んで、書かれてあることを題材にし、ことばを探究する点では言語学と同じです（人文社会系の研究は、だいたいことばの探究に収まるように見受けられます）。ただし、言語学以外の分野では、法律でも歴史でも、ことばによって表されるが、ことば以外のところにある世界を扱うのに対し、言語学はことば自体を研究対象とすると考えられます。

ここで「考えられます」と距離をおいた言い方をする理由は、これが私も長く考えていた言語学のイメージで、今ではそういう考え方が言語学の可能性を著しく狭める結果になると思われるからです。私個人の見解の変化にすぎないとすれば、わざわざ人前でお話しするまでもありませんが、ことばの特徴をことば自体の特徴として抽出する研究方針から、ことばが他の価値の交換手段と組み合わせられて担う付加価値を明らかにする研究方針への転換は、余波が大きいようです。例えば、なぜ政治家は失言で更迭されるか。これはことばの問題でありつつ、ことば自体の特徴では解決されません。理由は簡単で、政治家のことは、単純なことばとしてのことばではなく、権力という価値の交換手段と組み合わせられた付加価値を担うからです。

このような付加価値を担うことばの研究は、上で言及した分野のみならず、およそことばを表現手段とする人間の営為と関わりを避けることは無理で、卑近なところでは何事も専門の細分化（タコ壺化）をよとする研究業界にご迷惑をおかけするのではないか。そうであれば、予め頭を下げておくのが筋だろうという現在の所見を述べて、本発表の紹介と問題提起に代えさせていただきます。